

漢口樂善堂の歴史（上）

大 里 浩 秋

はじめに

かつて、明治二十年前後の数年間、中国長江の中流域に位置する港町漢口に日本人青年が前後して二十数名集まって、西欧列強が中国に武力を伴う経済進出を強める中、日本と中国の関係はいかにあるべきかを議論しつつ、まずは中国の現状を理解すべく、中国内を辺境に至るまで調査しようとして行動に移したグループがいた。歴史上、そのグループを彼らの活動資金を得るためと彼らの意図をカモフラージュするために開いた店の名前を冠して「漢口樂善堂」といい、あるいは「漢口組」とも呼んでいる。数年しか活動しなかったグループのことがなぜに今でも記憶されているのかといえば、彼らが数年間で中国各地を調査した記録が分厚い本にまとめられて残っているからというよりも、その数年の活動を経た彼らが、ある者は日清戦争でスパイ活動をしたかどで逮捕処刑され、ある者は生き延びてなお軍の情報活動を続け、またある者は中国語を話せる若者を育てる学校の運営に関わり、ある者は新聞社を経営したり、貿易に従事したりと、その後もずっと中国との関係の中で生きており、侵略とそれへの抵抗という緊迫した近代の日中関係に少なからぬ影響力を持っていたからであろうと思う。

とすれば、現役の陸軍将校荒尾精のもと漢口に集まった二十数名の若者にとって、現地で体験したことの持つ意味は何だったのか、また個々の参加者がそこでの活動からどんな教訓を得てその後を生きたのかを明らかにすることは、近代の日中関係を考える時の興味あるテーマになるはずである。しかし、これまでに知られているのは、昭和初期のまさに中国への武力侵略を強めようとしている時期の、その侵略やよしとするグループになる『東亜先覚志士記伝』上^①（以下、『記伝』と略記）や正統の『対支回顧録』下の列伝^②（以下、『対支』『統対支』と略記）によつて流布された内容がほとんどであつて、これらの英雄伝によるだけでは歴史の真実にはなかなか近づけないこと疑いない。幸いに筆者は、この数年来参加者のうちの石川伍一と宗方小太郎の関連資料を読む機会に恵まれ、また外交史料館中にも関連資料があることがわかつた。といつて、これらの資料だけでは新たな像を結ぶには全く不十分であつて、やはり上記の『記伝』や『対支』『統対支』に多くを頼る必要がある。しかし、それらも読みよふによつては新たな発見があるかもしれないと考えた。小文は、以上のような問題関心と資料事情を前提として、漢口楽善堂の活動とは一体どんなものだったか、その中で個々の参加者がどんな関わりを持つたかを時間の流れにこだわりながら再構成しようとするものである。その際、従来取り上げることがなかつた（あるいは、少なかつた）資料については、関連箇所において引用紹介することとする。

一、開設時のいきなり

漢口楽善堂が開設されたのは、荒尾精が明治十九（一八八六）年春に上海に渡り、そこで岸田吟香に会つて意気投合したことに始まるというのが通説である。荒尾と岸田の来歴についてはすでに多くの先行研究で明らかになつ

ているので、ここでは二人が出会った際の様子を『記伝』によって簡単にたどるにとどめる。「荒尾が岸田を訪ねて渡支の目的を告げ、東亜の経綸に就て遠大の抱負を語るや、岸田は忽ち荒尾の人物に傾倒し、東亜百年の長計の爲め共に手を取って起つことを約したのである。荒尾は：漢口に樂善堂の支店を設けて荒尾がその店を管しつ一つ一商人の風を装うて支那大陸の实情を調査し、その遠大な目的を達成したいという希望を打ち明けたのである。之に對して岸田は即座に快諾の意を表し、商品はいくらでも上海から送るから、邦家の爲めにその目的を遂行せよと勵まし、早速実行に取掛ることを勧めたのである。荒尾はこの頼母しき協力者を得て打喜びつつ直に長江を遡つて漢口へと急いだ」（原文のひらがなを現代仮名遣いに、漢字の旧字体を新字体に改めた。以下も同じ。また以下の『対支』『続対支』の引用についても同じ）。なぜ漢口なのかといえば、上海から長江を遡った地にあつて、「近くに湖北、湖南、河南、江西の沃野に連り、遠く陝西、甘肅、新疆、雲南、貴州等に通じ四通八達水陸交通の衝に當り」「荒尾は日本出発前から此地こそ自分が根拠を据えて東亜を救う策源地とするに足る場所と見込んでいた」からであつた。そして、『記伝』は続けて「湖北、湖南、河南、四川、陝西の如きは若しその何れかの一省を手中に收むることを得れば、以て天下に号令するに足る富と人口を抱蔵しているのであつた」と書いている。そう考へて荒尾は漢口を活動拠点に決めたといふことの説明である。これが事実としたら、この程度の位置づけで自らの信念を行動に移していった荒尾の実行力、あるいは使命感といったものには、ただただ驚嘆するしかない。

ところで、外交史料館にある関連資料「樂善堂実況探問の件」（以下、「探問の件」と略記）をみると、漢口の樂善堂支店は陸軍参謀本部から出張した伊集院大尉が三河臥水の偽名で明治十七年に開いたのが始まりのようである。その資料には「新街と申す支那町に一店を開き書籍と藥を売捌かせ居り候処、十九年春荒尾中尉と交代に相成、

其節引受け候店を同年夏居留地に移し」(原文のカタカナをひらがなの現代仮名遣いに、漢字の旧字体を新字体に改め、適宜句読点を加えた。以下も同じ) たとあり、詳しい記述ではないので事情はほぼ不明として残すしかないが、とまれ伊集院大尉が開いた店を引き継ぐ形で同じ陸軍所属の荒尾が漢口での活動を開始したことが明かされているのである。伊集院も岸田の援助を得、身分を隠して何らかの活動をしたのであろうが、荒尾に交代してからの活動が目立って世に伝わったために、史実そのものが漢口の樂善堂は荒尾から始まったものとして修正、記憶されたものと思われる。

二、漢口に行くまでの参加者の略歴

漢口樂善堂の活動に参加した人の数は二十人余とも三十人余ともいわれていて、はっきりした数は今となっては不明とするしかないようである。但し、『記伝』と『対支』、『続対支』の関連記事から拾い出しただけでも、三十人に近い名前が挙がるので、彼らをすべて参加者と見なし、さらにはほかの資料からも加えて、以下に、それぞれの生年、出身地、生い立ちの中で中国と関わりがあること、及び漢口に至るまでの経緯を、おもに『対支』、『続対支』をまとめる形で見ていく(以下、略歴を記述する際の引用はことわらない限り『対支』か『続対支』によっている)。但し、「はじめに」でもふれたようにこれらの記述には主観にすぎない表現や事実誤認を含んでいる場合があるので、気づく限りではほかの資料と対比しながら正すつもりである。

さて、上記の三冊のいずれかに載った名前を一括しておくこと次の如くである。

井深彦三郎、高橋謙、宗方小太郎、山内崑、浦敬一、山崎羔三郎、藤島武彦、中野二

郎、中西正樹、白井新太郎、石川伍一、片山敏彦、緒方二三、井手三郎、田鍋安之助、北御門松次郎、広岡安太、松田満雄、荒賀直順、前田彪、大屋半一郎、河原角二郎、高橋源助、黒崎恒治郎、田川、姫田、小城

さらに、『九州日々新聞』に載った「我等の回顧録」(二)③(以下、「回顧録」と略記)には、上記とだぶらない名前として次の二名がいる。

阿倍野利恭、浅野徳蔵

井深彦三郎は、慶応二(一八六六)年七月二日会津藩藩士の家に生まれた。同四年の会津戦争の際は、母に抱かれて籠城した体験を持つ。中国問題に関心を持ったのは明治十六年同郷中野二郎、白井新太郎(二人とも後述)の誘いによるもので、二十年中野らと共に中国に渡って「所謂漢口組の一人となり有為の青年として将来を嘱望された」。ところが、高橋謙(後述)の回想(『統対支』)によると、明治十九年夏に高橋が漢口樂善堂に立ち寄って荒尾に会うと、荒尾は同居の井深を紹介し、三人で飲みながら議論したとあり、それが事実なら、井深が二十一年に訪中したというのは間違いで、十九年の夏までには漢口入りして荒尾と懇意になっていた、とするのが良さそうである。そのつもりで先に進む。

高橋謙は、元治元(一八六四)年十一月福岡、築上西八田の地主の家に生まれた。明治十三年、十六歳で上京し、十四年に明治法律学校に入学、翌年には創立間もない東京専門学校政治科に入学したが、十七年に清仏戦争がおこ

ると中国留学を思い立ち、同年九月に上海に渡った。以後上海で馮相如宅に寄寓して中国語を学んでいる際、同地駐在の海軍武官曾根俊虎から福州での蜂起計画に参加するよう勧められたが、中国に渡って早々であることを理由に断った。その後時間をかけて中国各地を視察して回り、十九年漢口に到着して町田領事に会った際、最近葉善堂支店ができたと聞いて荒尾に会いに行った。高橋にとっては上海から旅に出た後に荒尾が上海に着いているので、荒尾のその後の動きは知らなかったが、荒尾の方は岸田から高橋のことを聞いていて、高橋があるいは旅の途中に漢口によって会えるかもしれないと期待していたのである。二人は何度か相談をしたが高橋はさらに旅を続け、翌二十年五月に漢口に戻ってきてから荒尾と行動を共にすることになった。

宗方小太郎は、元治元（一八六四）年七月五日に、肥後宇土藩藩士の家に生まれた。佐々友房が創立した済々黌に入りそこで中国語を学び、明治十七年清仏戦争開戦の折りに佐々に従って上海に渡り、当時上海で開いていた東洋学館に入った。そこには後に漢口葉善堂の活動に参加した山内崑、荒賀直順（いずれも後述）が在学していたが、まもなく学館が閉鎖した後も上海に留まった。宗方と荒尾の初対面はいつか、あるいはいつから漢口の活動に参加したかは、『対支』には早くにとあるのみではつきりせず、彼が大量に残した日記^④も明治二十年以前のものが欠落していて確認できないが、師の佐々が荒尾と面識があり、かつ上海で宗方が岸田と頻繁に往来している点からも十九年中あるいは二十年の早い時期には関係ができていたであろうと推量しておく。

山内崑は、元治元（一八六四）年磐城平藩の儒学者の家に生まれた。明治十四年には成善塾で漢籍を習い、十六年明治義塾及び専修学校で法律経済を学んだが、十七年に清仏戦争が起こると、戦況視察を名目にして福建に行くうとして中国に渡った。しかし「故あって」上海に留まり、その頃開設されていた東洋学館に入り、そこが閉鎖に

なると中国人馮昭煒と英国人ランバスに師事して中国語と英語を学び、二十年に漢口楽善堂に参加した。

浦敬一は、万延元（一八六〇）年四月四日肥前平戸藩藩士の家に生まれた。明治六年十三歳の時征韓論に敗れた西郷隆盛が鹿児島に帰って私学校を建てた際、そこに入ろうとして親に反対されて果たせなかった。明治十四年二十二歳の時に二度目の上京をして専修学校に入り、十六年に卒業した際には優等の成績で「権利論」と題する講演をして非民権論といふべき国権発揚の必要を論じた。その後新聞記者となったが、明治二十年九州を遊歴して熊本では佐々友房ら、福岡では箱田六輔らと意見を交換し、同年中に記者を辞めて十月に上海に渡り同地で荒尾精に会って十一月には漢口楽善堂に入った。『対支』にはなぜ中国に行くことになったのかを記しておらず、勤めていた新聞が故あって発行を停止したので「内政に対する計画に見切りをつけて」（ここでいう内政に対する計画とは、同文の記述に従えば、九州中の同志が一丸となって政界に進出しようとしていたことを指している）中国行きを決めたとしている。

山崎羔三郎は、元治元（一八六四）年七月四日福岡藩藩士の家に生まれた。明治の初め家は鞍手山口村に移り、鞍手の中学を卒業して十七、八歳の頃に福岡に出て儒学と英語を学び、「玄洋社の少壮連中と交遊し、此時代に大陸経綸の志を養成した」。明治十八年に上京、当時は国会開設が数年後に迫って皆「内政に心を奪われ、支那問題など口にする者となかった」中で、荒尾精のみがそれを唱道していたのに賛同し、荒尾を「一見して意気投合し、愈々支那渡航を決意し」浦敬一、北御門松次郎（後述）らと約し相前後して中国に渡ったのは明治二十年十月であり、すぐに漢口楽善堂に行った。

藤島武彦は、明治二年薩摩藩藩士の家に生まれた。明治十八年父の仕事の関係で東京に出て陸軍士官学校に入る

うとしたが、先輩に「汝の如きは到底学問を以て立身する男ではない。宜しく支那大陸に活動せよ」といわれ、本人も中国に行つて実情を見「一朝事あるの日、資して以て大いに報国の志を遂げんと発念し」て、十七歳で上海に渡り、同地で中国語を学んでから明治二十一年に荒尾の門に投じた。

中野二郎は、元治元（一八六四）年会津藩藩士の家に生まれた。明治十二年に上京し岡千仞の門に学んでから東京師範学校速成科に入り一時教員となつたが、十七年二十一歳の時「大陸経営に志し」、柴四朗の紹介で上海に渡り東洋学館に学んだ。同学館が廃されると福州に行き小沢豁郎の蜂起計画に参加、九州を遊説して福岡で頭山、平岡ら玄洋社同人と知り合つた。しかし、計画が実現しなかつたので荒尾が漢口に「対支調査機関を開き有為の士を招致する」や積極的に参加した。但し、この記述からはいつ参加したかは不明である。

中西正樹は、安政四（一八五八）年十二月十二日美濃岩村藩藩士の家に生まれた。明治十二年二十二歳の時に上京、小学校教師をした際中国語を学び、十六年二十六歳で天津に渡航、十八年外務省留學生に採用されて北京公使館で中国語を学んだ。二十年五月まだ留学期間中だったが、天津樂善堂の売薬類を携えて北京から「万里遠征の途に上」り、苦勞の末に二十一年六月北京に戻つた。そのころ宗方小太郎が北京に滞在しており、彼の紹介で漢口に行つた、とする。しかし、宗方の日記に照らせば、宗方はその頃北京にはおらず、また彼の日記には、中西は浦敬一が新疆行きを断念して二十一年十月に漢口に戻る途中偶然出會つて共に漢口に行つたことが書かれているので、今は宗方の証言に従う。

向井新太郎は、文久三（一八六三）年七月二十日会津藩藩士の家に生まれた。幼時秋月胤永の漢学塾に学び二十歳でその助教となり、翌明治十六年東次郎が芝罘領事代理として赴任するのに随行し、同地で中国語を学んだ。

いったん帰国して、十七年清仏戦争開始に際し「同志中野二郎と再び渡航して上海に到り」、二十年頃に漢口に行った。

石川伍一は、慶応二（一八六六）年七月十八日南部藩藩士の家に生まれた。彼が漢口に行くまでの経緯を『対支』はほぼふれていないので、筆者が調べたこと⁵⁾によって以下を記す。十三歳で上京して島田塾で漢学を学んでから十八歳で興亜会が主催する中国語の学校に入った。交易を求めて中国に渡ったことがある父や父の知り合いで後に芝罘領事になる東次郎の影響で中国への関心を持ち始めたと考えられる。明治十八年二十歳で上海に渡り、海軍大尉で当時天津領事館に勤める曾根俊虎の世話で彼の私設助手として天津に滞在した後、十九年には上海の樂善堂に職を得ようとして数ヶ月上海に滞在するが不調に終わり、また天津に戻って曾根の後任関文炳海軍大尉のもとで働き、二十年（のいつかは不明だが）に漢口の活動に参加した。

片山敏彦は、明治二（一八六九）年四月八日熊本県御船町の士族の家に生まれた。十六年に濟々巒に入り十八年から中国語を学んだ。二十一年に「上海に留学」し、後に漢口に行った。「回顧録」によると、上海では井手三郎、阿部野利恭（いずれも後述）と共に「広東人馮昭煒（元神戸支那領事）の宅に寄留し、専ら北京官話を学習し傍内地旅行の準備として蓄髪し」二十二年に漢口に行ったとする。しかし、宗方の日記によれば、片山、井手と緒方（後述）は二十二年の遅くも十月初めまでには漢口に着いていたことがわかる。

緒方三三は、慶応三（一八六七）年十月二十三日熊本の代々総庄屋を任じた家に生まれた。十四歳で濟々巒に入り「佐々友房の訓育を受けて初めて海外雄飛の必要を認め」宗方らと中国で活躍すべく中国語を学んでいる際、荒尾が漢口で「有為の志士を糾合しつつあるを聞き」上海に渡り、同地で一年間「語学並に支那習俗の研究を遂げ、

弁髪の延びるを待って漢口に赴いた」。

井手三郎は、文久二（一八六二）年五月二五日熊本中島村の素封家の家に生まれた。明治十六年濟々鬢に入り、十八年高等科に進んでから中国語を学んだ。「夙に清国漫遊の志を抱き」二十年九月上海に渡り、一年間同地に留まった後漢口に行った。

田鍋安之助は、元治元（一八六四）年六月八日福岡糟尾郡山口村の農家に生まれた。明治十二年十六歳の時から同郡の医師の書生となつて医学を学び始め、十五年上京して海軍軍医学校に入学、在学中に同期生の紹介で中野二郎を知り中野の親友鈴木天眼とも親交を結んで中国に対する関心を増した。二十二年海軍病院を免職になるや上海に渡り、一週間当地の樂善堂に滞在してから、漢口に向かった。

広岡安太は、明治元（一八六八）年熊本に生まれた。明治十九年上海に渡り城内馮国鈞の家に寄寓して中国語を学んだ。二十一年春「北清各省を跋渉し、山河の險夷、人物の興亡を探」つてから漢口に着くと、そこでは十九年の上海行きの際に偶然一緒になった荒尾が「有志の青年を集合して他日為すあるの基礎を造らんとしつつあったのを見て」、「乞うてその門に入」つた。

松田満雄は、文久元（一八六四）年五月十一日細川藩藩士の家に生まれた。「少壮藩儒に就て漢籍を学び、後ち志を立て清国に航し」、明治十九年荒尾が漢口に樂善堂を開いたと知るや、傘下に入った。『対支』のこれに続く記述からは、十九年中に漢口に着いたと読める。しかし、宗方の日記（明治二十二年二月二日）に照らすと、十九年ではなくそれ以後に着いたとするのが妥当のようであるので、いつ着いたかは今は不明とする。

荒賀直順は、文久元（一八六四）年十一月庄内藩藩士の家に生まれた。明治十七年に「決死上京」し、その頃末

広重恭らが上海に東洋学館を創設して生徒を募集中だったので、これに応じて上海に渡った。しかし同学館はまもなく閉鎖したので十九年に帰国、翌二十年大日本帝国水産会社の創立と共に入社して再び中国に渡り、漢口の樂善堂に寄寓した。何年に参加したかの記載はない。

前田彪は、慶応二（一八六六）年六月二十六日細川藩藩士の家に生まれた。十八歳まで済々黌に学び、「後ち志を立てて」中国に渡り、漢口の活動に参加した。「回顧録」では、明治十九年に中国に渡り、二十年には漢口に行ったとする。

大屋半一郎は、慶応元（一八六五）年十二月十二日館林藩藩士の家に生まれた。興亜会の中国語の学校に学び、渡清して上海樂善堂に身を寄せ、明治二十一年に漢口の活動に参加した。

黒崎恒次郎は、明治五年七月十九日岡山県御津郡横井村に生まれた。小学校修了後、明治十八年に郷里の先輩杉山岩三郎の庇護の下十三歳で上海の樂善堂に入つて中国語を学び、荒尾が漢口に「天下の志士を糾合するや」「其傘下に最少年者として」加わった。『対支』の記述からは、明治二十年の参加と読める。

最初に名前を羅列したうちの、北御門松次郎、河原角次郎、浅野徳蔵、阿部野利恭、田川、姫田、小城については、『対支』、『統対支』には独立した項目として立てられておらず、これまで見てきた人物のように略歴を綴ることができなかった。また、『対支』、『統対支』に項目が立てられていても、例えば宗方や石川のように独自の資料が発掘できれば、より詳細に各人の動きをたどることができるのであるが、二人以外について同様の発掘、あるいは他にあり得る既存の資料を探し当てていないのは、基礎作業としては誠に不十分なものである。この点は今後

の課題として残すしかないが、こうした不十分な作業を通して気がつくいくつかの点を指摘して、二のまとめとする。

まず年齢は、開設した明治十九年の時点でいうと、安政五（一八五九）年名古屋藩藩士の家に生まれたリーダー荒尾は二十七歳で、参加した者の年齢は、上が中西の二十八歳、下が黒崎の十四歳であり、多くは二十代の始めから半ばである。かなり若い層の集合体といえる。次に出身家庭は、ほとんどが武士の出であり、ごく少数が儒者か農家であるが、農家とて地主とか庄屋をしている家柄である。そして幼い頃から儒学を学び、上京して専門学校に入り、あるいは上京せずとも県庁所在地で進学している人がほとんどで、当時としてはかなり高い水準の教育を受けた人たちだった。さらに出身地は、略歴を綴った二十二についていうと、熊本の七人を筆頭に福岡は三人、九州で半数を越え、他には福島が五人、あとは各地にちらばっている。また、出身地に関わる人間関係とそれには無関係の他の人間関係が錯綜して存在するように見え、これこそが解明すべき課題の一つであるが、それは、事実関係をなお確認する中で考えることとする。

三、開設時から二十一年までの動き

ここでは、表向きは商店であり、秘密裏に中国各地の情報収集を行った漢口寒善堂の運営実態及び参加者の個別の活動内容を、明治十九（一八八六）年の開設時から二十一年までに限ってみていく。

まず、「探問の件」によれば、荒尾の「月給凡四十円と外に手当が一年一千円位」であった。また、明治十九年夏にイギリス租界に店を借り、さらに「貨物と店員の増加及来漢日本人の止宿に便ならしむる為め二十年に又ひと

住居借入れ、都合ふた住居とし（一棟にて二住居になる様に建築したる西洋館なり）、家賃はふた住居にて一ヶ月洋銀六十六元余（荒尾三十二、三元、岸田吟香十五、六元、拙者）在漢口領事町田実一のこと…大里も十六元ずつ補助致し、しめて六十六元余に相成候」とある点は注目すべきことである。荒尾に年間千円もの活動資金が陸軍參謀本部から渡っていたことが一つであり、もう一つは、月々の宿代として岸田がその一部を負担しているのと同時に、町田領事も一部援助していることである。これらの活動資金や援助が荒尾の漢口での活動の最初から最後まで変わらぬ額で支払われたものかは不明とするしかないが、従来樂善堂で売られる商品の売り上げが唯一の活動資金であったという理解が専らだった故に、圧倒的に足りないにせよ陸軍から一定の資金が入り、かつ外務省筋も少額とはいえカンパをしていたことを知るのは興味深いことである。商売以外の任務を持っていたことを領事館が気づいたうえでカンパをしたであろうことは、宗方の日記にしばしば領事と交流している様子が書かれていることでも推量可能である。

さて、二で参加者の略歴を見た際に明治十九年中に漢口の活動に参加したと思しき者が二名いたが、その人たちの動きを知りうる限りで確認しておく。一人は井深彦三郎である。彼については、具体的な行動が記されているわけではなく、先に見たように、開店間もない樂善堂に荒尾と一緒に行ったとの高橋謙の証言があるのみである。もう一人、二で十九年中か二十年早くには参加していると推量した宗方小太郎の場合は、二十年の四月から十二月までの間、江蘇、山東、直隸、盛京、山西、河南、湖北と調査の旅を続けて、翌二十一年秋から清書を始めて二十二年秋にそれをその記録を『北支那漫遊記』と題してまとめているが、この調査が樂善堂の活動の一環として実施された可能性は否定できない。ただしこの二人の動きから開始期の樂善堂の姿を浮き彫りにするのは難しい。あるいは、

その時期の参加者がまだごく少数であり、目指すべき活動についても店の営業についても、基礎固めあるいは模索の状態にあつて、宗方の動きは一定程度の準備ができた個人が当時の事情で調査が必要だと感じた地域へと単独で行動を起こすしかなかったことの具体例ととらえてよいのであろうか。

ところが、高橋謙が二十年五月に漢口についてからはそれまでと違った展開を示すことになった。『対支』の「高橋謙」によれば、彼は荒尾と協議して「同志糾合の資金に充当するため、楽善堂を土台として本邦商品の委託販売をなす計画を樹てたが、此の計画は正に凶に当り、開業早々可成りの繁昌で、其の結果追々に「憂国志士を呼びよせることになった。この記述に従うならば、当初楽善堂で扱う商品のみを販売していたが、高橋が参加してからは楽善堂の商品を中心にしつつも他の商品も扱って結構な利益を上げて、「同志糾合」の条件ができていき、その結果として二で見たとように二十年から二十一年にかけて参加する者が増えていき、それに伴って住居も広いところに移らざるを得なくなったとすると、先の「探問の件」の証言とも辻褄が合うことになる。

さて、高橋には他にも二十年の漢口についての証言がある^⑥。それによると、「(二十年春)当時の在留邦人は荒尾君と井深と予の三人の外領事館員二名あるのみ。其の後櫛を飛ばして有志の士を招致せしに、相前後して来集せるもの：十余名あり、荒尾君を中心として将来の大方針を樹立した」。ここでいう「将来の大方針」とは、おそらく彼らの活動に言及するときには必ず引用される次のような文章であろう。『記伝』には、「根本方針」と称して

「吾が同志の目的は、世界人類のために第一着に支那を改造すること」

をまっさきに載せ、続いて、この根本方針の実現を図るために荒尾が執筆起草したとする同志の心得書といえるものを、「一般の心得」と題して載せている。

第一条 我党の目的は極めて大なれば、任最も重く、道最も遠し、あに軽進緩慢の能く致す所ならんや。其興廢の關係する処実に尠少にあらず、宜しく深謀遠慮、其縦跡を慎み、其挙動を重んじて、万に一失なく、能く其機に投じては疾雷激電、耳をおおい眼を瞬くに違なからしめ、以て其目的を全うせんことを期せざるべからず。故に自ら顧みる最も重うして、平常他人に接するにも勉めて温和丁寧を旨とし、決して少壮書生がましき挙動あるべからざるのみならず、殊に支那人に遇う時は、其挙動を軽くし成るべく談を商業上に移して商人を装う可し。

第二条 各分任の事務を勉むるは勿論、余閑と雖も成るべく無益の言動を慎み、偏に実力を養成すべきものとす。

第三条 堂員の同志者を二に分ち、一を外員とし、一を内員として堂長之を総括す。

第四条 堂長は常に内外員を督して、其事業の進退に注意し、兼て一般の大勢に注目して専ら其進歩を計画すべき事。

第五条 外員は直に一方に當つて事を処するの重任なれば、最も巧に運動して嫌疑を避け、各分任の目的を果すは勿論、自ら其地方の大勢に注目して、他日の便益となるべき件々は、請究遺漏なきを要すべき事。

第六条 内員は各其分担の事務に勉勵し、専ら事業の進捗を図り、兼て諸外員に便益を与うることを勉べき事。

第七条 毎年春季に於て各外員を集め總會を開く、然れども本堂或は外員の都合に依り、及び堂長或は内員の各地を巡回する時は之を停止することあるべし。

但し總會を停止する時は、各地の状況及決議せし件々は都て之を各外員に通知すべし。

さらに、上記の心得に関連して、「内員概則」、「外員の探査すべき心得」なども作られているが、その引用は省略する。こうして、参加者が一定増えてきた段階おそらくは二十年の夏頃に参加者を律する方針や規則がつくられて、それに基づいて具体的な行動方針も議論されたのであろう、高橋の言によると「一般方針定まると同時に、枢要の方面に支部を開設することに決し、湖南支部を設けた」。なぜ湖南かといえば、「当時同省は未だ曾て外人の足跡を印せざる地方として伝えられ、欧米宣教師さえ一步も省内に入ること能わざりし程なりし為め、勢い其内情を知るの必要は同志間に認められ」たからであった。この支部開設を担当したのは高橋で、彼は二十年夏のうちに長沙に行き「支部を開設して商売を始め調査に着手」した。支部を作るとは、楽善堂支店を開くことと同義であったのである。

ところで、「回顧録」に二十―二十一年頃の漢口楽善堂の様子を証言している箇所があるので、それを引用する。「漢口楽善堂は…書籍と薬品とは岸田より無限に供給せられ其代金は使い放題で、只雑貨だけは普通の商取引であった。依つて販売の方を商務部と称し数名日本人及び支那人を使用、我等同志は名は変だが之を事業部と称し、支那の実情の調査研究と内地旅行を為し実地の踏査をなすのである。依て旅行に出て居らざる事業部員は日々日出より日没迄支那政治の要目たる各種の典例より地理等は翻訳し、夜は各自好む所の読書及び語学の研修に没頭し、土曜の夜は事業部のみ座談会を開き研究せる事に意見を交換する外、荒尾氏が提出せる宿題に就き各々意見を陳述し又た各地よりの通信に就き品騰研究し、時々寄せ来る在倫敦福島安正中佐の特信の如きは欧州の事情を知るを得る為め頗る興味を以て迎え居たり」。

販売担当を商務部と称し、我等同志は事業部と称したとするこの回顧と荒尾の内員、外員の分け方をどう整理し

て理解すればいいのだろうか。関連資料が少ないからには簡単に整理できるとは思えないが、内員、外員はそこに参加した日本人仲間内の任務分担であり、内を固める仕事と、外に出歩く仕事すなわち各地を調査する仕事の区別があった。それに対して、商務部、事務部とは、表向き呼び習わされていた通称で、中国人従業員を含めて商売に従事している者は商務部であり、商売には直接関わらずにごろごろしているようである。議論やら勉強やらをしている日本人を便宜的に事務部といっていたということではないだろうか。それにしても、「回顧録」にあるこの「事務部」の日本人の日常描写は、他の資料には見られない興味深い内容である。

二十一年春、ロシアが欧亜を貫通するシベリア鉄道敷設を計画しているとの情報が樂善堂に届き、同時にロシアが中央アジア鉄道をイリ方面に延長する計画があることも伝わってきた。『対支』の「浦敬一」によると、この時荒尾は「清国各地に散在して居る同志を漢口に招き寄せ、当面の処置を協議した。集まった人は実に二十余名で……」と書いている。しかし、そこに列記している名前で例えば宗方は上海にいたまま参加していないし、他の者にしてものどきに各地から一斉にはせ参じる態勢であったとはとても思えない。おそらくは、二十年から二十一年にかけて徐々に漢口入りした若者がこの時期には一定数に達していて、彼らが議論に参加したというだけのことではあるまいか。荒尾たちは「此二鉄道により満州と伊犁との両方面から露国の大兵が殺到することになれば、支那は腹背に敵を受けて忽ち呑噬の憂き目を見るに至るであろう。こうした形勢を座視することは亜細亜の復興を以て任とする」(『記伝』) 我々の忍び得る所ではないと考え、ロシアの南下を阻止するための方策について討議を重ねて、いくつかの決議を行い、それを実行に移すことになる。そのうち、『続対支』の「高橋謙」に書かれている決議は次のようなものである。

一、清朝は我国を敵視し協同禦侮の大義を解せざる者の如し。故に吾等同志は漢民族を助けて其革命運動を助成し、以て日支提携の実現を期す。

一、東亜経緯の実行準備として必要なる人材を養成教育する為め上海に学校を設立し有為なる人材を養成する。

一、長沙、重慶、北京等に支部を設け、革命派志士と連絡を保持し、革命運動を促進する。

一、将来露国の侵略戦に備うるため、同志を外蒙古に派して活躍せしむ。

もう一つ、『対支』の「浦敬二」に紹介されている決議は次のようなものである。

一、露国の将来西比利亞鉄道に依りて支那方面に勢力を伸張するを、絶対に防遏の策を施し置きて、一面には遅くも十年以内に、支那の改造を實行すべきこと。

二、露国の東侵を防遏する方策を實行する為め、浦敬二を伊犁方面に派遣し、臨機処置せしむること。

三、湖南支部の外、四川省重慶府に支部を設け、該地方の情況を探究すること。

四、北京宮廷の人物行動を探查し、中央の政況を視察し、遠く関外滿州方面の形勢を踏査すること。

各四項目目から成るこれら二組の決議を比べると内容上に矛盾があるわけではなく、重なつた問題意識によつて書かれたものであることは一目瞭然である。しかし、内容上前者は基本的方針を述べて比較的長期的な見通しを示しているのに対して、後者は差し迫つて現実に対処すべきと考える点を列挙している。それ故、両決議が作られた時期には一定のずれがあり、前者は、先に見た「根本方針」や「一般の心得」の延長線上で検討されまとめられたものであり、後者こそが二十一年春に検討されたものであるとするのが妥当ではないかと筆者は考えている。

とまれ、二十一年春の決議に基づいて、浦敬一は北御門松次郎、河原角太郎と共に六月十八日新疆のイリに向けて出発した。彼らの任務は、時の「伊犁將軍劉錦棠を説いてその幕僚となり、露国の南下を挫く」(『記伝』)といふものであり、それと関連して、ロシア兵が進入する可能性のある道路を初めとする新疆各地の地理や社会状況を視察することが含まれていた。こうした雲をつかむような任務が複数の人間によつて検討され、それを遂行すべく皆目事情が知れない土地に出発する青年の思いや如何。浦たちの漢口出発時の状況は、宗方の日記によつて知ることができる。当時上海にいた宗方は、浦から相談したいことがあるから至急来てくれとの手紙を受け取つて漢口に行き、浦等三人と荒尾と共に写真屋に行つて記念撮影をしており(二度目は失敗して、又翌日撮つている)、出発前夜は「送別の宴を開き痛飲快談し」「再会の復た期す能わざるを以て座客為に悲喜」と記している。出発に當つて三人が持参した資金は充分なものではなく、藤島武彦と大屋半一郎の二人が前もつて書籍等を蘭州まで持ち運び、それを当地で売つた代金を後から来る三人に渡すことでまかなうという算段になつていた。そこで藤島らは三月中に漢口を出発して蘭州に向かつた(ということは、三月までには決議されたことになる)が、途中の船で海賊に襲われて旅費を取られてしまい、(荷物は無事だつたよう)やむなく襄陽に留まつて同地で荷物を売り払い、ようやく三人に渡す資金ができたとして蘭州に急いだが、三人と待ち合わせた時間はゆうに過ぎていて会えないまま、翌年一月に漢口に戻つてきた。三人はといえば、蘭州に着いて藤島等を三十日あまり待つた後の相談で、浦は漢口に引き返して出直そうと提案したが、北御門、河原二人は彼に従わずに北京に向い、浦一人が十月末に漢口に戻つた。浦が翌年の旧暦正月四日に北京の宗方あてに送つた手紙にその間に起こつたことへの心情が縷々記されている。この手紙の一部は『記伝』に収録されているが、三人が別行動をとつたことに言及した部分は、英雄伝の記述にふ

さわしくない」と判断したのであろう省略されており、他でも紹介されることがこれまでなかったようである。以下に抄録する。

「…彼二子は去年漢口を発する時共に死生を同じ險を冒して力の及ぶ限を尽さんことを誓いながら、今日に至りて何とか異論を申出し遂に違約するの挙動を呈するに至りたるは真に驚呀に堪えざる儀と存じ候；此の如き挙動に相成りたる次第、諸同志に対して面目なき儀に御座候；三人同行中互に意見を持ちて相争うが如きことあるも、要するに其胸中少しく不淡薄なる所あるより生じ来たりしものにして殆んど児童のけんかと一般；時に児童の喧嘩をなすも歯牙に掛るに足らず苟も信を以て交わり義を以て接し共に大事を成すことを目的として之に従事せば、何人といえども共に事を成すべからざるはなしと敬一平生自信致居目前の有様は一笑に付し居候処、不幸にして中途に於て計画行違い互に相□離するに至り□□の心跡明なるに至らずして遂に諸君をして此三人は相調和せず共に事をなすべからずと云わしむるに至る誠に以て恥入たる儀に御座候。畢竟敬一才識浅劣の致す処にして自ら責むる耳に御座候；」（原資料のカタカナを現代仮名使いのひらがなに、漢字の旧字体を新字体に改め、適宜句読点を加えた。また、解読不能の字は□で示した）。

浦と北御門ら二人の間に具体的にどんな意見の食い違いが生じたかについての言及はここにはなく、同行中の諍いはあったが、それは子供の喧嘩と同じで歯牙にも掛からないものだったとし、信義を重んじ「共に大事を成す事を目的として従事すれば」克服できるはずだと思っていた、しかし中途での計画の行き違い（蘭州で先発隊に予定通りに会えなかったことを指しているのだろう）が三人の対立を決定的なものにしてしまったと述べて、二人をまとめられなかった自らの非力に恥じ入っているのである。失敗してなお任務を実現させたいとする痛々しいまでの

まじめさが伝わる文面ではある。

次に、二十一年中に宗方小太郎が決議に盛り込まれた北京支部設置に向けて動いたことが『対支』や『続対支』に書かれているのだが、そのことに触れる前にこれに関連することで荒尾から宗方に宛てた手紙が残っている^⑨ので、それをまず全文紹介したい。これまで公開されたことのない文面だからである。その手紙は極端なまでに漢字の使用が少ない(例えば、「我トウ」、「系トウ」、「ヘイ器」、「天津カン部」のように)のが特徴であるが、それを必要な限り漢字あるいはひらがなに改める。また、解読不能な字は□で示す。さらに、内容は三部分に分かれているので便宜的にA、B、Cを付して示す。なお、AとBはこれで内容が完結しているとれなくはないが、Cはその出だしが「せらるべし」となっていることから、その前の部分が欠けていることははっきりしている。

A、我党の事業に熱心憤励せざるべからざるは、西に任ずるも東に任ずるも異ならざるべし。然れども、就中兄等が彼地に任ずる其責や重しと云わざるべからず。如何となれば、彼地は他日我党演戯の首部なるを以て、今回急遽同部設置の目的は、如何なる時勢の変遷に遭遇するも早く其機を未顕に□透し、以て我党をして其機をうしなうことなからんが為なれば也。我兄願わくば、能く此意を留め可成速に基礎建築の方策を立てられたし。若し夫れ躊躇時日を移すが如きあれば、我党の不幸を見るに至らんも亦た知るべからざる也。□立の事業たる其關係誠に広くして、小は日本大は世界に渉る事故、自ら其責の重きを顧み、百転万起小心大胆巧に俗態を装い、能く内外人の疑を避けらるべし。若し夫れ嫌疑を受くるが如きことあらば、不都合少しにあらざる也。万端不尽意□

□
□
□
□

明治二十一年六月

堂長 精

宗方仁兄

該地 諸仁兄

B、天津幹部設置の目的

第一 朝野の人物及馬賊、白蓮教等の跳跡実情を探究し、能く其人心を収攬し、他日我用となすべき方法。

第二 □□族の系統を細査し、併せて他日の妨害となるべき朝野の人物を訪求し、之を除去すべき方法。

第三 兵器、彈藥、糧食、銀錢等諸般の水陸軍務に必要な器材物料の探偵。

第四 清国の内外国に対する諸処分及諸計画、事件の探偵。

C、とせらるべし。

一、上海に本部を移さるる前は同所の樂善堂へ送致し、之より当地へ送達することを定む。

一、事業の興廢に関する事件ある時は、能く其の主旨を解する人壺人を送るべし。

一、資金及人物

一、当時は、人、金共に支出多くして、今直ちに支出するものなし。兄彼地に至らば山口兄と協議し、先ず書業店を堅め書業を携帯して領内各地を実験し、其目的を遂げ得るに費すべき人と金とを精算すべし。其期に臨んで之を支出すべし。

一、来年下半年中に二人以上の人を送るべし。

一、我党事業第一着の成否は、偏に彼地の得失に因る事故、予は充分力を出度考也。然れども内外力を用いざるべからざる処誠に多し。故に請う、其目的を遂げ得べくして最小限を以て見積らるべし。

一、目的を達するに費すべき年数の定限

一、陰曆明年より先き七年間五年間四年間の三段に分つて、其費すべき人と金とを定め、其間に目的を達し得べき見込を立らるべし。

一、此三段の見込を立つるに費すべき年月は、明年正月より壹ヶ月半を限りと定め、其定まりし後は速に壹人を派して協議せらるべし。

一、本部より同幹部への通達。

一、内外の該処分、該計画、事業の進捗の模様、其他全て参考に供し得べき事件の大意は、之を通報すべし。

一、支部の設置

一、北京及盛京府へは、人員の都合に依り明年中に支部を設置することあるべし。

一、明年下半年中に於て、遼東の最も適切なる地方に一の牧畜所を設置すべし。

一、前二項の設置に当り、便益なる方法及金の多寡等を探偵し置かるべし。

一、注意の件々。

一、遼東一般の探偵は先ず之を見合せ、直隸、山東を第一に着手し、次に山西に及ぼし、遼東の探偵は当分牧畜支部に委すべし。

一、報告は可成意を用い、忌むべき語は□□或は暗号を用い、凡て内外の嫌疑を来さざる様注意せらるべし。

一、本年北京にて探偵及買入を要する物件、左の如し。

一、在北京現在大小衙門の数目、其組織及現行の景況。

一、最近の六部処分則例、

一、枢垣紀略、

一、各省処分則例、

一、大清会典事例の買入。

前二項の外必要なる事件及書籍は、其□□を計て探偵或は買入らるべし。

このうち、Aは、明治二十一年六月付けで宗方および該地諸仁兄宛に手紙形式で檄をとばしている内容である。

Bは、その見出しにある如く、天津幹部設置の目的が書かれている。Cは、今年から来年にかけて取り組むべき任務や指示などが記されている。そして、ABCは同種の便箋を使いながらそれぞれ別々に書かれているので異なる日付で書かれた可能性は否定できないが、関連した内容であることからして、Aの日付で一括して書かれて宗方に郵送されたものと考えられる。あるいは、先にふれたように浦の誘いで六月十二日に宗方が漢口に行っており、彼の日記によれば二十二日まで滞在してその間に上記の内容、とくにCに関わることについて荒尾と相談しているから、漢口にいる間に二人で相談した内容と宗方あての指示を文章化して直接手渡した可能性もある。いずれにせよ、ここに記されていることにはいくつか注目すべき点がある。

その二は、この時期に天津幹部を急ぎ設置しようとしている点である。AとCの表現にある「彼地」とは天津を指すのであろうが、そこは「他日我党演戯の首部なるを以て」どんな時勢の変化も逃さず「その機を失うことなからんが為」にそれを設置する必要があると述べている。Cでは、北京には人員の都合を見て明年中に支部を作ることを考えたとしており、それよりもまず天津幹部だといっているように読める。「幹部」とは支部よりも重要な場所であるとの意を込めたものであろう。とすると、先に見た決議では、北京支部の設置が決められているのに天津のことには触れていないのはどういう訳であろうか。その二は、Cに上海に本部を移すことを考えていると伺わせる文面がある点である。その文面が簡単にすぎるのでそれ以上に云々できないものの、この時点で荒尾はゆくゆく本部を漢口から上海に移さねばと考えていた可能性はあろう。その三は、活動を遼東、直隸、山東、山西にまで広げようとしている点である。これらの地域は、前年(二十年)に宗方が調査して回った範囲であり、彼の日記(六月十二日)にも、荒尾が「予に囑するに直隸、山東、山西、遼東の経略を以てす」とあり、二日後に「此日北部四省経略の考案を作る」と書いている。この計画が単なる机上の案で終わったものかは、もう少し先の動きを見る必要があろう。

日記を見ると、宗方は漢口から上海に戻ってすぐ(六月二十六日)に樂善堂に岸田を訪ねて「天津に支店新開云々の事を商量し、約を定て帰」った。これが先に見た天津幹部設置に向けた動きである可能性はある。しかし、宗方は次の行動はとらないまま七月初めから帰国して、熊本で二ヶ月近くを過ごし、八月二十日に上海に戻り、岸田と会って「北京行の事を商量し」、九月四日樂善堂の薬と本を携えて船に乗り、十日に天津に着き、十六日には馬車を雇って北京に向かった。北京に着くと瑠璃廠に科挙の受験生目当てに樂善堂書房を開いていた吉田清揚を

訪ねて、そこに泊まりながら薬店を開くための店探しをし、外国人の名前では店を出せない規則があることから中国人の名義を借りる算段をし、さらに開店の許可願いを役所に出すなどの準備をした。その後、科挙の試験が終わって吉田が本屋を開めるのを手伝い、先に店用に借りた頭条胡同に吉田と共に引越し、開店の許可が下りて中国人を店員に雇い店の飾りをすませて、十一月一日に開店した。その数日後、上海の山内崑（彼は九月初めに漢口から上海樂善堂に移ったことが宗方の日記に見える）からの手紙で、岸田が北京開店を取りやめるといつているので、すぐ上海に戻れといってきたが、急ぎ返事を書いて説得した結果閉店しなすむという一幕があった。北京に着いた後の宗方の日記から注目できる動きを二、三取り出すならば、一つに、到着以来しばしば山口外三と会っていることで、例えば九月二十八日には「…酒を飲み我党事業上の事を詳談痛話し」ている。先に見た荒尾のCの文章中の「彼地に至らば山口兄と協議し」とある山口兄とは、この山口外三のことではあるまいか。二つに、十月に荒賀直順が北京に着き、十一月末には新疆行きが一頓挫した後で浦敬一と別れた北御門と河原が来て、宗方の周囲に漢口の仲間を含む何人かの交流ができつつあることで、三つには、北京で仕入れた情報（十二月二十五日の日記には「鉄道、皇帝天壇幸、馬賊、福州哥老会人名等の各情」とある）や『六部処分則例』を荒尾宛に送っていることである。先のCに書かれた荒尾の指示を一部実行に移しつつあることがわかる。彼の日記からはこの程度の動きしか知り得ないけれども、従来いわれている宗方が北京支部を創設したという内容は、このような時間の流れで始まったということであろう。ただし、天津幹部設置に関しては不明なままである。

次に、四川省重慶に支部を設置する件は九月に実行に移された。その任務についた四人のうちの一人石川伍一は、上海から海路北京に移動した後五月十九日に一人で北京から出発して蒙古との境界にある張家口、豊鎮と回り、山

西、河南、陝西、湖北をほぼ三ヶ月間調査して、八月十二日に漢口に戻った。その旅の詳細は彼の『萍遊日記』によって知ることができるが、五千六百里（二千八百キロ）の行程をわずか二十元の旅費で済ませたと自ら語っている。先の決議と石川の単独行との関連は判然としない。決議の後にも集団による行動と個人の行動が平行して実施されたということか。

さて、支部設立のため重慶に向かったのは、石川の他、広岡安太、松田満雄、高橋謙で、高橋がリーダー格であった。重慶の地をなぜ選んだかについては、高橋の言によれば「支那の西隅に僻在し、別に一天地を画する関係よりして、苟も支那経営を見逃すべからざる枢要の地区たるを以て自然の金城鉄壁とし」たからである。出発したのは、石川の『入川日記』^①と題したこの時の記録によって、陰暦の八月十七日すなわち陽暦の九月二十二日であったことがわかる。『統対支』の「高橋謙」によると、彼らは書籍、売薬等三十箱を携えて重慶に向かったが、途中巴峡で船が岩礁に触れて大破した、しかし乗客、貨物は無事だったので代わりの船に乗り換えて重慶にたどり着いて、樂善堂支店を開設した。但し、石川の日記を見ると、途中座礁した船を何度か目にしたとは書いているが、自分たちの乗った船がそうだったとは書いていない。『統対支』の書き手は、つい筆が走って劇的な場面を挿入したのかもしれない。事故が起こっておかしくない難所がいくつもあったことは石川も繰り返し書いており、乗客も降りて船を引っ張らなければならぬ場所があったことも記している。また、所々で船を下りては岸壁の集落を見物したりもしていて、調査の意味も兼ねた移動であったことに気づかされる。こうして、漢口から三ヶ月近くを要して、陰暦十一月六日すなわち陽暦の十二月八日に重慶にたどり着いたのだった。

他に、二十年に長沙に開いた湖南支部は、高橋が二十一年春に漢口に戻り、さらに重慶に転出したことにより、

山内崑が交代で赴任した。『続对支』の「高橋謙」によれば、山内が「支那人志士蔡輔廷と共に設立する等を決議した」とあり、また『对支』の「山内崑」によれば、山内が主任となつて長沙に赴き「雑貨及び海産物問屋を開き、後不幸にして同支店が火災に罹り商品全部烏有に帰したので閉店した」とある。先に触れたが、山内は九月に上海の樂善堂で働き始めているので、火災で湖南支部の活動がストップしてから上海に向つたということであろうか。以下、二十二年から後の動きは、稿を改めて「下」として書き継ぐことにする。

(注)

注①、黒龍会編、昭和八年刊。復刻本は、原書房、昭和四十一年刊。

注②、東亜同文会編、正は昭和十一年刊、続は昭和十六年刊。復刻本は、原書房、正は昭和四十三年刊、続は昭和四十八年刊。

注③、発行年月日は未確認。上海社会科学歴史研究所蔵宗方小太郎資料中の切り抜きによる。

注④、宗方の日記は、明治二十一年からなくなる大正十二年までの大半は、上海歴史研究所に所蔵されている。詳細は、大里「上海歴史研究所蔵宗方小太郎資料について」、神奈川県大学人文学研究所『人文学研究所報』No.37、二〇〇四を参照のこと。なお、明治二十一年の日記で中国滞在の内容は、上記の文中で紹介した。

注⑤、大里「石川伍一のこと」、神奈川県大学人文学会『人文研究』第二三五集、一九九九。

注⑥、石川漣平『東亜の先覚石川伍一と其の遺稿』、人文閣、昭和十八年からの孫引き。原載は井上雅二『巨人茂尾精』。

注⑦、注⑥に同じ。

注⑧、上海歴史研究所蔵。

注⑨、注⑧に同じ。

注⑩、石川漣平前掲書所収。

注⑩、注⑪に同じ。